

My Life as a Househusband

主夫と生活

夫と妻の「役割交換」は可能か？

伊丹十三の翻訳エッセイで贈る、

「主夫」になった男の愉快的体験記。

内田樹氏の解説を加えて新装復刊！



ニューヨークの新聞社で活躍していた人気コラムニストが、40歳を迎えたある日、突然仕事を辞める。夫婦で役割交換し、妻は一家の大黒柱として働き、夫は家事や子育てをすることに。「主夫」になることに対する周囲からの冷たい反応、自信があったのにうまく作れない料理、どうしても克服できない掃除下手、深夜まで続く洗濯物の山との格闘、子供の成長をほほえましく眺めるひととき……。

一九八三年に刊行された伊丹十三の翻訳エッセイが31年ぶりに復刊です。「主夫」が奮闘する姿は、仕事と家事とのバランス、家族との関係、男女の役割分担について、新たな視点から考えるきっかけを与えてくれます。

●目次●

第一章

コリーヌが事業家になり、俺は主婦を失うこと
コリーヌ、俺の夫になるといい出すこと

第二章

俺が退職金の計算をすること
俺が遂に辞表を書くこと

第三章

誰も俺を引き留めず、俺は酔い潰れること
俺が主夫としてデビューし、主人のコリーヌを会社へ送ること
主夫第一日の生活で時間が伸びたり縮んだりすること……etc.



●書籍情報●

定価 1600 円(税別) 四六判並製 336 頁

ISBN978-4-87758-732-1

C0095

【訳者プロフィール／伊丹十三(いたみ・じゅうぞう)】

1933年、京都生まれ。1977年没。俳優、テレビマン、CM作家、エッセイスト、翻訳家、商業デザイナーなど、多岐にわたって活躍。『お葬式』、『マルサの女』などの脚本家、映画監督としても高い評価を得る。著書に『ヨーロッパ退屈日記』、『女たちよ！』など多数。二児の父親として子育てをするなかで、親子関係や育児論に高い関心を寄せ、精神分析についての見識も深めたことから、当時の社会現象や思潮を捉えた雑誌『モノクル』を創刊。現在、愛媛県松山市にある伊丹十三記念館で多彩に活躍した氏の足跡を辿ることができる。